

# 国際関係史学会 (CHIR) 2009 東京大会

開催日：2009年12月5-6日(土・日)

場所：青山学院大学 総合研究所ビルディング 12階 国際会議場

テーマ：「冷戦と地域統合—ヨーロッパとアジアの国際関係史比較」

## プログラム

1日目 12月5日(土曜日)

### 第1部「ヨーロッパとアジアの国際関係史に関する比較研究：冷戦と地域統合」

基調講演 10:00-10:30

- ・渡邊啓貴(在仏日本大使館 公使) 「太平洋と大西洋における西側同盟内での冷戦と国際関係」
- ・小倉和夫(国際交流基金理事長、青山学院大学客員教授) 「日本とヨーロッパ」

1. 欧州統合と冷戦の始まり 10:30-12:00

司会 柴宣弘(東京大学教授)

報告者

- ・アラン・アグラン(パリ・ナンテール大学准教授)  
「ヨーロッパ統合と冷戦に直面した元レジスタンスの闘士たち：1943-1956」
- ・川嶋周一(明治大学専任講師)  
「1958年9月のフランスのNATO覚書の再検討：世界政策からヨーロッパ政策へ」
- ・倉科一希(国際教養大学准教授)  
「アイゼンハワー、ケネディと『第五カ国』問題 —西独核兵器保有に対するアメリカの政策」

昼食 12:00-13:30

2. 冷戦の亢進と欧州・アジア 13:30-15:00

司会 石井修(一橋大学名誉教授)

報告者

- ・アルフレド・カナヴェロ(CHIR事務局長、ミラノ大学教授)  
「イタリアと冷戦」
- ・百瀬 宏(津田塾大学名誉教授)  
「小国の双方向現実主義と列強政治：日本人研究者から見た戦後フィンランド」
- ・オラヴィ・K・フェルト(フィンランド・オウル大学教授)  
「第二次大戦後世界におけるヨーロッパとヨーロッパの一部としてのフィンランド」

3. 冷戦と反体制派の成長 15:00-16:30

司会 押村高(青山学院大学教授)

報告者

- ・ウィリアム・フォッセ(ICU教授)  
「ドイツの平和運動と1970年代および1980年代におけるドイツ政治と政治文化に与えたその影響」
- ・下斗米伸夫(法政大学教授)  
「東アジア時代における冷戦：1956-1972のソ連・朝鮮民主主義人民共和国間関係を中心に」
- ・コンスタンティン・サルキーソフ(山梨学院大学教授)  
「ロシアの反体制派」

討論者 押村高(青山学院大学教授)

レセプション 青学会館 17:00-19:00

2日目 12月6日(日)

## 第2部「冷戦終焉20年と、ヨーロッパ・アジアの地域再編」

開始挨拶・基調報告 10:00-10:30

総合司会 押村高(青山学院大学教授)  
・ロベール・フランク(CHIR会長、パリ大学教授)  
「フランス外交と冷戦の終焉」

1. 冷戦終焉20年 ―欧州とアジア 10:30-12:00

司会 森井裕一(東京大学准教授)

報告者

- ・  
「ロシアおよび近隣諸国に対するEUの政策：1989-2009」
- ・羽場久美子(青山学院大学教授)  
「冷戦終焉20年と中東欧の再編」
- ・舒旻(早稲田大学准教授)  
「地域統合におけるリーダーシップ：機能主義的アプローチ」
- ・吉野良子(青山学院大学総合研究所研究員)  
「EU統合におけるアイデンティティ構築と他者としての米国：1969-1973」

昼食 12:00-13:30

2. 東アジアにおける地域協力と諸課題 13:30-15:00

司会 首藤もと子(筑波大学教授)

報告者

- ・デビッド・ロウエ(オーストラリア・ディーキン大学教授)  
「アジア大西洋におけるコロombo・プランと‘ソフトな’地域主義：1950年代と1960年代におけるオーストラリアとニュージーランドの文化外交」
- ・アルフレッド・C. ロブレス Jr.(デ・ラサール大学教授)  
「ASEAN-EU FAT交渉の開始：パラドックスとジレンマ」
- ・ユグー・テルトレ(パリ大学教授)  
「冷戦の終焉はアジアの地域主義を促進したか？」

討論者 天児慧(早稲田大学教授)

コーヒーブレイク 15:00-15:30

3. 総括討論 15:30-16:30

共同司会者 渡邊哲貴(在仏日本大使館公使)、羽場久美子(青山学院大学教授)

パネリスト

- ・ロベール・フランク(CHIR会長、パリ大学教授)
- ・
- ・百瀬宏(津田塾大学名誉教授)
- ・アルフレッド・C. ロブレス Jr.(デ・ラサール大学教授)

4. 閉会の辞 16:30

押村高(青山学院大学教授)

<<趣意書>>

於：青山学院大学、総合研究所ビルディング、12階 国際会議場

テーマ：「冷戦と地域統合—ヨーロッパとアジアの国際関係史比較—」

The Cold War and the Regional Integration ----

Comparative Studies on the History of International Relations between Europe and Asia----

(CHIR 日本大会での検討課題)

「ヨーロッパとアジアの国際関係史に関する比較研究

—冷戦終焉20年と世界経済危機の下での地域統合再考—

the History of International Relations between Europe and Asia

----Reconsideration of the Cold War and the Regional Integration

Under the 20 years anniversary of the End of the Cold War and the World Economic Crisis----

## 1. <全体構想と研究目的 >

本研究は、冷戦終焉20年とグローバル化・世界経済危機を迎え、大きく変容しつつあるヨーロッパと東アジアの国際関係史を、I) 冷戦研究、II) 地域統合に焦点を当て、国際規範、安全保障、民族、人の移動などの観点から、総合的に検討するものである。

その最大の特徴はアジアとヨーロッパ、国際政治学・比較政治学・歴史学など研究対象と研究分野の枠を越えて包括的な共同研究に取り組むことにある。

### (A) 冷戦研究の現段階と問題点

近年の冷戦史研究は、①旧ソ連邦や東欧諸国の新たな史料を用いた精緻な研究、②ヨーロッパ諸国のような米ソ超大国以外のアクターに着目した研究、③文化交流などのトランスナショナルなレベルや、NGOなど非国家アクターに着目した研究、等の分野で大きな発展を遂げている。

その一方で、依然として解明されていない問題が数多く残っていることも事実である。本申請事業の副題とした冷戦と地域統合の関係も、その一つに数えられる。第二次世界大戦後のアメリカ政府は、基本的には欧州統合を支持していた。しかし、ソ連や個々の西欧諸国との関係を踏まえて、アメリカの政策は時に大きく揺らいでいる。さらに、地域統合に参加した西欧諸国の間に、アメリカとの関係や、冷戦と欧州統合の関係など、統合の方向性に関する合意があったわけではなかった。

さまざまな理念や政策、思惑が交錯する中で、欧州の地域統合が冷戦とどのような関わりをもったのか。この問題を解明することによって、欧州における冷戦と地域統合に関する新たな知見を得るのみならず、欧州と同じように冷戦の舞台になりながら、地域統合は進まなかったアジアの情勢を理解する一助となることが期待される。

### (B) 主権の重層化と新研究視角

欧州(EU)の地域統合の研究は、第二次世界大戦後より冷戦期・冷戦後の経緯に至るまで、機構・制度、経済の観点から、また東アジア地域主義の検討は、主に安全保障と経済の観点から集中的に検討されてきた歴史を持つ。

グローバル化の進展に伴う国民国家の変容の過程で、①グローバル、②広義の地域、③国家、④狭義の地域という、「主権の4層構造」が、主に欧州において飛躍的に伸張した。主権の変容は地域統合の政体・制度を捉える上で欠かせない論点であり、そうした主権の重層性を基礎に、新しい研究視角を提示する。

### (C) 多元的研究と政策提言

アジアとヨーロッパの地域統合の比較検討の分析手法としては、1)統合理論、2)安全保障、3)民族と国家、4)人の移動など、多面的・総合的な観点から、国内国際的共同研究を、各領域の第一線の研

研究者たちを集め海外研究者とも共同研究を行う。

これらの研究成果は、**Proceedings** を含め、刊行予定である。

#### (D) 日本の位置と役割

「ヨーロッパとアジアの国際関係史に関する比較研究—冷戦と地域統合」を通しての本共同研究の最大の長期的目標として、冷戦研究、拡大EUと、ASEAN/東アジア/アジア太平洋といった多様な「アジア」構想を持つ東アジアの地域統合の研究を通し、相互の課題の特徴や問題点を相互認識し比較検討することにより、日本がそうした国際関係史の中でどのような役割と政策を提示していくべきかを、再検討するということがある。

その際、さらに念頭に置くべきは、1) グローバル化・競争力と地域統合、2) アメリカ型規範と個々の国際規範との関係、3) 格差と社会保障、4) 主権とアイデンティティの問題など、従来の国際関係枠組みを超えた多元的次元を意識しつつ再検討することである。以上の課題を、国際政治史、安全保障、ナショナリズム研究、歴史学などの各領域で最先端の研究者を組織することによって遂行するものとする。

#### 2)何をどこまで明らかにするのか

本国際会議の遂行準備に際し、われわれは、比較研究を2つのグループ、すなわち、

- ① 国際関係史の中の冷戦に見る、東アジアと欧州の比較、
- ② 冷戦終焉後の国際関係におけるヨーロッパとアジアの地域協力・地域統合、に分けることにより、これらの研究成果を、2日にわたり、世界各国の国際関係史、冷戦史研究者、EU統合・地域統合研究者との共同研究と密接に連携しながら、**intensive** で詳細かつ緻密な共同研究を行うものとする。  
それにより、
- ① ヨーロッパ、東アジアの戦後と、冷戦への移行過程を、まず国際政治史上で実証的・理論的に整理し、グローバル化の下での地域統合の位置づけを、アメリカ・ソ連(ロシア)との関係の中で明確にする。その際、小国や中立の役割を重視する。
- ② ヨーロッパにおける地域統合の拡大ないし変容を、1) ナショナリズム、4) 越境的移民の問題から分析すると共に、特に旧社会主義国、中・東欧を取り込みバルカンに拡大しつつある多元化・多民族化したEUが、現在如何なる問題を抱えているかの実態を踏まえ、東アジアの多様性と地域統合の試みを具体的に検討する。
- ③ 現在進行中の、東アジア共同体構想や ARF, APEC 研究を、ASEAN、ないし中国との関係の中で、より多元的・国際的に位置づけなおす。  
ここでは、1) 中国の台頭、アメリカのグローバルな一極構造と呼ばれる、国際・地域構造の変化と地域共同体形成との関係、2) 経済のグローバル化の進展と地域諸国の開発戦略の変容が地域共同体形成に及ぼす影響、3) 地域の国際関係の規範と原理を巡る競合と地域共同体形成の関係、4) 国際制度と地域制度との関係、に焦点をあて、拡大EUとの比較を試みる。
- ④ 以上を踏まえ、現在、欧州でもアジア・日本でも、学術的・政策決定的に危急の課題となっている、グローバル化と地域統合に対応する実践的課題分析と政策提言を行う。

#### 3)当該分野における本研究の学術的な特色、独創的な点、および予想される成果と意義

本研究は、第一次世界大戦後の冷戦史をめぐる国際関係史、グローバル化と地域化の下で起こっている統合と分断、人の移動などの最前線の問題を、学際的に夫々の領域で研究をリードする最先端の叢智を結集して、実践的研究を行う試みである。

- ① 冷戦史に関する、冷戦崩壊後の資料の公開を踏まえた国際関係史の総合的検討  
百瀬宏、石井修、下斗米伸夫、川嶋周一、倉科一希
- ② ヨーロッパにおける地域統合の拡大と深化、諸課題の多元的整理(規範、安全保障、民族)  
Robert Frank、渡邊啓貴、羽場久美子、
- ③ 東アジアの地域再編と統合、安全保障、現状と諸問題(規範、安全保障、民族)  
Amitaf Acharia、Pan Guan、李鍾元、首藤もと子

これらの計画は、既に夫々のレベルでは、インテンシヴな研究を国際的共同研究者と共に、国内外で意欲的に共同研究を行ってきた蓄積がある。本共同研究は、そうした研究の到達点を踏まえ、PhD 論文提出途上の若手研究者とも共同しつつ、グローバル(国際関係)、地域、国家、下位地域(人の移動とシチズンシップ、マイノリティ)の「4層の主権構造」という縦軸と、①国際統合理論、②拡大EU、③東アジアの各地域統合、④移民とマイノリティという横軸からアプローチし、これら4つの各論を踏まえ、冷戦史研究・地域統合研究の共同研究を行う。

以上を、海外研究者とも結びつつ、12月の国際会議に収斂し、その報告書を和文と英文でプロシーディングスとして活字化する。

#### <研究計画・方法>

ヨーロッパと東アジアの地域統合の問題は、それぞれの地域で優れた研究が存在するものの、東アジアと欧州の地域統合を相互に検討する試みが、理論的にも実証的にも、安全保障面、人の移動の問題でも、共同研究が積み上げられてきていない現状に鑑み、研究計画は、以下の4グループによるインテンシヴな研究報告と相互検討会、年1回のそれらの研究の成果報告と議論としての国際シンポジウムをあわせて行っていく。

#### <研究計画>

- 1 国際関係史における冷戦史研究の実証的・理論的検討（百瀬宏）
- 2 ヨーロッパにおける地域統合の戦後、冷戦終焉後の、実証研究（羽場久美子）
- 3 東アジアの地域協力関係、地域統合の実証研究（首藤もと子）
- 4 全体の相互検討と、問題点・課題の抽出、政策提言の積み上げ。

以上を踏まえ、2009年12月に催される国際会議の大枠は、次のようになる。

1 国際関係史における冷戦史研究の実証的、理論的研究については、百瀬宏氏を中心として、渡邊啓貴（地域統合と米欧関係）、石井孝（アメリカと冷戦）、を中心とし、アメリカ、欧州（フィンランド、ハンガリー、ポーランド）などの研究者を招聘する。

関連して下斗米伸夫（アジア・ロシアの冷戦）、李鍾元（朝鮮半島）らの協力も得つつ、総合的に研究の再検討を行う。

2 ヨーロッパにおける地域統合の冷戦終焉後の課題と問題点については、1）アメリカとの関係を軸とした国際規範の相克、2）グローバル化と安全保障・境界線をめぐる問題、3）主権の移譲とナショナリズムの台頭、4）格差の拡大と人の移動、などを、ロベール・フランク（EUとEU仏関係）、渡邊啓貴（外務省・フランス公使）羽場久美子（拡大EUとナショナリズム）、木畑洋一（イギリスと拡大EU）らと協力し、また若手研究者、清水聡（東西ドイツ統一とEU）、吉野良子（ヨーロッパ・アイデンティティ）らの最先端の研究の協力も得つつ、問題の所在と課題を提示する。

3 東アジアの地域再編、地域統合の実証研究については、1）米中など大国間関係の変容と地域共同体形成、2）経済のグローバル化の進展・地域諸国の開発戦略の変容と地域共同体形成の関係、3）地域の国際関係の規範と原理を巡る競合と地域共同体形成の関係、に焦点をあてる。

首藤もと子、李鍾元（朝鮮半島の国際政治、六者協議と地域再編）を中心に、東アジアの多元的統合組織や合議機関の理論的・制度・組織的整理と実証研究を、進める。

#### <ヨーロッパとアジアの国際関係史に関する比較研究—冷戦と地域統合—に関する海外研究者との共同研究>

##### 1. 海外研究協力者

現在協力を仰ぎようと考えているのは、以下の研究・行政機関や研究者たちである。

アメリカ・ウィルソンセンターThe Cold War International History Project (CWIHP)、ハンガリー56年研究所、ベルギー・ブリュッセルの欧州委員会の政策決定を担当する欧州政策研究センター（EPC）元所長フラッシャー・キャメロン、フランス・パリ大学第1国際関係史研究所所長ロベール・フランク、イタリア・パドヴァ大学のEU-COE研究代表アントニオ・パピスカ、ポーランド・政策

研究所（コレギウム・ツイヴィタス）の各研究者、ハンガリー科学アカデミー民族問題研究所所長ラースロー・サルカ、ロシア・サンクト・ペテルブルグ大学国際関係研究所所長 K.K.クードレイ、国際政治と安全保障に関しては、エドワード・A・コルジェイ（イリノイ大学教授・同大学グローバル研究センター所長。専門は米国外交政策と軍備管理を中心とする安全保障論）、東アジアの地域統合については、アミタフ・アチャリア（イギリス・ブリストル大学教授：国際関係論）、ジョン・レーヴェンヒル（オーストラリア国立大学：東アジア地域統合とEUの比較）、中国では、Pan Gun Wan(上海)、韓国（李元徳）などである。

これらの国々および大学・研究所と連携しつつ、より各国の研究水準を踏まえた共同研究、比較研究を行うことにより、実質的な政策提言へとつなげていく。

## 2. <国際会議の部会・パネル、および各国での研究会における、各国研究者との共同研究の成果報告と意見交換>

2009年12月の Call for Papers については、来春 CHIR のホームページ記載および各国研究者に送付予定であるが、既に CHIR の理事長・および理事会では、来年12月に東京大会が開かれることが承認されている。

（別紙添付、ロベールフランク CHIR 理事長からの承認とテーマ提案参照）

本研究はまた、ISA(世界国際関係研究学会)、AAS(世界アジア研究学会)、AAASS(アメリカ・スラブ研究振興学会)、世界EU学会（ECSA-World）、EU-COE などとも連携しつつ、国際的にも研究貢献できるものを目指す。

現時点では、2009年の12月の国際会議と連携し、2010年ISAの国際会議で、冷戦終焉後のヨーロッパとアジアの地域再編の比較研究のパネルを設けることをあわせて検討している。これらにより、ヨーロッパ、アジア、アメリカの研究者と共同で数パネルを組織し、意見交換を行う。また欧州各国や、中国や韓国、および台湾のEU研究者および東アジア地域統合の研究者とも連携しながら、各国で小研究会を組織し、資料や情報の交換、研究の議論と是正、共同研究の構築を目指す。